

このうち証券会社引受分は40億円(前年同月73億円)にとどめられた。

### 起 債 状 況

(単位・億円、カッコ内は純増ベース)

	42 年				
	9 月	10 月	前年同月	11 月 見込み	前年同月
合 計	1,016 ( 694)	894 ( 577)	740 ( 479)	973 ( 668)	881 ( 615)
事業債	576 ( 359)	473 ( 271)	328 ( 143)	531 ( 328)	419 ( 241)
一般	379 ( 227)	362 ( 242)	199 ( 87)	350 ( 224)	260 ( 139)
電力	197 ( 132)	111 ( 29)	129 ( 57)	181 ( 104)	159 ( 102)
地方債	70 ( 50)	71 ( 45)	62 ( 40)	72 ( 45)	62 ( 38)
政保債	370 ( 285)	350 ( 262)	350 ( 295)	370 ( 294)	400 ( 336)
金融債	1,560 ( 533)	1,493 ( 438)	1,320 ( 428)	1,748 ( 672)	1,399 ( 478)
利付	668 ( 376)	593 ( 274)	584 ( 307)	748 ( 419)	653 ( 367)
割引	892 ( 157)	900 ( 164)	736 ( 121)	1,000 ( 254)	746 ( 111)
新規長期 国債	1,000	600	800	1,000	1,300
証券会社 引受分	54	45	73	40	74

## 実体経済の動向

### ◇民需の増加を主因に経済活動は依然拡大基調

最近の鉱工業生産、出荷の動きをみると、生産は9月に+3.3%と大幅な増加を示したあと、10月も+1.0%と続伸した。一方、9月に大幅増加(+3.3%)を示した出荷は、10月には-1.3%とやや減少したが、これには前2ヵ月急増を続けた鋼船、鉄道車両の反動減が大きく響いており、これらのフレをならしてみると、引き続きかなりの増加基調を続けているものとみられる。個々の需要要因の動向をみると、設備投資、個人消費など引き続き需要の堅調さを裏付ける資料が多く、大勢としてみると、民間需要の増加を主因に総需要は相変わらず高いテンポの拡大を継続しているものと思われる。

これをやや詳しくみると、まず民間設備投資については、企業の投資意欲には依然衰えがみられず、ごく最近発表された各種調査によっても、増勢は多少鈍化しているものの、なお根強い拡大を続けているものとみられる。先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節変動調整済み)も、期末期初の影響はあるにしても、10月は製造業を中心に前月の落込み幅を大きく上回る増加を示し、また建設工事受注も根強い増勢を続けている。民間在庫投資については、在庫率は総じて低水準に推移しているが、ただメーカー段階の製品在庫投資は、夏から秋口にかけて伸び悩んだあとだけに、このところやや増加が目だっている。さらに個人消費については、労働力需給のひっ迫に伴う一般賃金水準の上昇や、食費の多額の支払いによる農耕地区の消費活発化などから、全体としてかなりの盛り上がりを示している。現に銀行券発行高がこのところ相当な増勢を続け、全国百貨店の売上高(季節変動調整済み、速報)も最近目だって増加していることはその一端を物語るものであろう。目先き企業の9月期決算の好調を背景

に、年末にかけては史上最高のボーナス支払いが予想されているが、先行きの消費動向とからんで注目される動きといえよう。この間、10月の輸出は季節変動調整後で9月の水準をやや下回ったが、すう勢としてはゆるやかな回復歩調をたどっており、今後徐々に需要の増加要因としての比重を高めていくものと思われる。

(生産——依然として根強い上伸基調を継続)

9月の鉱工業生産(季節変動調整済み)は、前月比+3.3%と39年4月(同+4.1%)以来の大幅な増加を示した。この結果、7～9月の生産は前期比+3.8%と、4～6月の伸び(+4.5%)には及ばないにしても、依然根強い上伸基調を継続している。ただ、9月の生産がこのように急増したのは、モデル・チェンジなどにより前2ヵ月減少を続けた自動車の生産本格化、鉄道車両の著増など一時的とみられる要因も少なからず響いている点はいなめない。特殊分類別にみると、各財とも軒なみ増加を示しており、なかでも資本財は、資本財輸送機械(乗用車、鉄道車両等)の著増(+13.9%)が大きく響いたうえ、一般資本財も運搬機械、化学機械等の増加から微増(+0.3%)したこともあって、全体で+5.9%の大幅な増加を示した。また、建設資材は鉄構物を中心に+1.8%の増加となり、消費財も、耐久消費財(軽四輪自動車、家庭用電機等)、非耐久消費財(繊維製品、化学製品等)ともそれぞれ+5.3%、+1.5%とかなりの増加を示したことから、全体では+3.5%と相当の増加となった。この間、生産財は鉄鋼製品を中心に+1.1%と、伸び率こそ前月を下回ったものの、引き続き根強い増勢を継続した。

10月の鉱工業生産(季節変動調整済み、速報)は、前月比+1.0%と続伸した。10月の増加が前月に比べ小幅にとどまったのは、前月急増した自動車、鉄道車両の反動減など特殊事情が少なからず影響しているものとみられ、生産は依然として根強い上伸基調を続けている。特殊分類別にみると、一般資本財が電気機械(電動機器、発送配電機器等)の増加を主因に、かなりの増加(+2.2%)

を示したのが目だったほか、資本財輸送機械も、自動車、鉄道車両の減少にもかかわらず、鋼船の大幅増加から+2.1%と相当増加した。また、建設資材も、鉄骨、セメント等の増加を中心に+2.0%と引き続きかなりの増加を示した。一方、消費財では、耐久消費財が前月急増した家庭用電機の反動減などが響いて-1.4%の減少となったほか、非耐久消費財も、写真フィルム、たばこ等を中心に-0.6%の減少となったため、消費財全体では-1.0%の減少を示した。生産財も化学製品(無機薬品類、石油化学製品)、繊維(化学繊維、紡績織物)等が増加したものの、鉄鋼の減少が大きく響いて前月比横ばいにとどまった。

### 鉱工業生産の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

	41年				42年		
	10～12月	1～3月	4～6月	7～9月	8月	9月	10月
鉱工業	210.0	218.7	228.6	237.4	235.7	243.4	245.7
指数							
前期(月)比	5.6	4.1	4.5	3.8	1.1	3.3	1.0
前年同期(月)比	19.3	19.9	20.2	19.4	18.2	21.1	19.8
投資財	7.1	6.9	5.3	3.1	-0.4	5.0	2.8
資本財	8.7	7.4	5.6	4.0	-0.5	5.9	3.0
同(輸送機械を除く)	9.1	6.7	8.4	4.1	-0.9	0.3	2.2
輸送機械	7.5	8.1	2.8	4.9	0.1	13.9	2.1
建設資材	2.3	4.9	3.9	1.4	0.8	1.8	2.0
消費財	2.3	0.4	3.0	3.1	1.0	3.5	-1.0
耐久消費財	6.4	2.9	4.2	4.2	1.3	5.3	-1.4
非耐久消費財	0	0.1	1.4	2.4	0.9	1.5	-0.6
生産財	5.4	5.0	3.6	4.4	2.5	1.1	0

(注) 通産省調べ、42年10月は速報。  
前年同期(月)比は原指数による。

(出荷——大幅増加のあとやや減少)

9月の鉱工業出荷(季節変動調整済み)は、鋼船、鉄道車両、自動車等の輸送機械の著増を中心に前月比+3.3%の大幅な増加を示し、7～9月では前期比+3.1%と4～6月の伸び(+3.0%)を若干上回った。特殊分類別にみると、まず資本財では、一般資本財が電気機械(発送配電機器等)、ボイラー・原動機、風水力機械等の減少から-1.2%とやや減少したものの、資本財輸送機械は乗用車、鋼船等の大幅増加から+25.4%の著増を示し

たため、全体では+11.6%の増加となった。建設資材も、窯業製品(セメント、ガラス等)の減少にもかかわらず、鉄構物(鉄骨、橋梁等)の増加から+2.9%と3ヵ月ぶりに増加に転じ、生産財も鉄鋼製品を中心に+0.1%の微増を示した。しかし、消費財では、非耐久消費財は増加(+0.7%)したものの、耐久消費財が6、7月急増を続けた家庭用電機の反動減などから-5.3%とかなりの減少を示したため、全体では-0.8%と小幅の減少となった。

10月の鉱工業出荷(季節変動調整済み、速報)は、-1.3%の減少となった。もっとも、これには前2ヵ月急増を続けた鋼船、鉄道車両等の輸送機械の著減が大きく響いており、これらのフレをならしてみると、出荷の足どりは引き続きかなりの増加基調にあるものとみられる。特殊分類別にみると、まず7月以来伸び悩み状態にあった一般資本財が、+2.6%とかなりの増加を示したのが目だった。これは一般機械(運搬機械、金属加工機械)が前月の反動減もあってやや伸び悩んだものの、電気機械が発送配電機器をはじめ、電動機器、通信機器等が軒並み増加を示したほか、鋼管、鋼索、ドラム缶等の鉄鋼製品も増加したため

である。このほか、建設資材は亜鉛鉄板の減少にもかかわらず、鉄構物、セメント等の増加から+1.4%と前月に引き続いて増加した。また非耐久消費財も、織物類(染色整理)、紙等の増加から+0.2%の増加となったが、とくに耐久消費財が歳末需要に備えた家庭用電機の著増から+6.6%と大幅に増加したのが目だった。なお生産財は、機械(汎用内燃機関、工具類)、化学製品(石油化学製品、タール製品等)、化学繊維等の増加から、+0.7%と引き続き根強い増加を示した。反面、資本財輸送機械では、自動車が前月急増の反動もあって、トラックを中心にやや減少したほか、同じく前2ヵ月著増を続けた鋼船、鉄道車両がその反動減からともに大幅な減少を示したため、全体で-19.0%と著減した。

(在庫——増加傾向)

9月の鉱工業製品在庫(季節変動調整済み)は、前月比+4.2%と久々にかなりの増加を示し、9月末在庫は前四半期末に比べ+4.3%の増加となった。特殊分類別にみると、各財とも増加しているが、なかでも一般資本財(+11.5%、農業機械、エアコンディショナー等)および耐久消費財(+9.3

### 鉱工業製品在庫の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)末比増減率・%)

	41年	42年				42年		
		12月	3月	6月	9月	8月	9月	10月
鉱工業	221.4	230.7	234.7	244.7	235.0	244.7	250.2	
指数								
前期(月)末比	-1.7	4.2	1.7	4.3	0.7	4.2	2.2	
前年同期(月)末比	-2.1	0.5	3.8	8.7	5.4	8.7	11.1	
製品在庫率	106.0	107.8	105.2	105.7	104.9	105.7	109.5	
業								
投資財	-1.5	1.8	-3.6	10.2	3.5	6.4	2.4	
資本財	-1.0	0.1	-7.5	13.1	4.4	9.5	2.8	
同(輸送機械を除く)	3.9	-5.1	-9.8	15.1	7.1	11.5	8.7	
輸送機械	-8.2	18.6	-7.2	5.3	-2.0	4.2	-7.3	
建設資材	-3.1	5.7	4.1	6.2	1.9	1.3	0.5	
消費財	-1.6	9.7	2.0	-0.1	-0.9	2.5	0.4	
耐久消費財	0.6	16.5	-0.2	-3.8	-4.7	9.3	0.1	
非耐久消費財	-0.3	4.0	3.0	2.1	0.9	1.4	0.6	
生産財	-2.2	1.2	4.1	5.5	1.2	4.3	3.9	

(注) 通産省調べ、42年10月は速報。  
前年同期(月)末比は原指数による。

### 鉱工業出荷の動向

(季節変動調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減率・%)

	41年	42年				42年		
		10~12月	1~3月	4~6月	7~9月	8月	9月	10月
鉱工業	204.0	212.9	219.2	226.0	223.9	231.4	228.4	
指数								
前期(月)比	5.1	4.4	3.0	3.1	0.5	3.3	-1.3	
前年同期(月)比	18.0	18.5	17.1	16.5	14.7	18.3	15.9	
投資財	5.7	6.9	5.1	2.9	1.3	9.7	-6.5	
資本財	6.7	7.6	5.6	3.3	1.8	11.6	-8.5	
同(輸送機械を除く)	7.9	6.7	8.4	2.9	-2.9	-1.2	2.6	
輸送機械	4.8	9.6	3.2	3.9	6.7	25.4	-19.0	
建設資材	3.9	2.5	3.3	1.7	-0.1	2.9	1.4	
消費財	4.1	-0.1	1.8	2.7	-0.5	-0.8	1.6	
耐久消費財	5.2	-3.9	10.0	8.3	-1.8	-5.3	6.6	
非耐久消費財	3.9	1.2	-0.9	1.4	0.2	0.7	0.2	
生産財	5.0	4.5	3.1	3.7	1.2	0.1	0.7	

(注) 通産省調べ、42年10月は速報。  
前年同期(月)比は原指数による。

％、家庭用電機)の増加が目だった。このほか資本財輸送機械は自動車を中心に+4.2%、生産財も鉄鋼製品を中心に+4.3%とそれぞれかなりの増加を示し、また建設資材は、板ガラスの増加などから+1.3%、非耐久消費財は繊維製品を中心に+1.4%といずれも増加した。上記のような出荷、在庫の動きを映じて9月の製品在庫率は+0.8%(同指数105.7)と前月に続いて上昇したが、その水準は本年6月ごろの水準に近く、前年同月(115.1)を9.4ポイント下回る低水準にとどまっている。財別には、非耐久消費財を除き各財とも前年の水準を下回っている。

10月の鉱工業製品在庫(季節変動調整済み、速報)は、前月比+2.2%と8月末の増勢を持続した。特殊分類別にみると、資本財輸送機械を除いては各財とも増加した。すなわち、まず一般資本財では鉄鋼製品(鋼管、ドラム缶等)が出荷の好調から若干減少したものの、一般機械(動力脱穀機、エアコンディショナー等)の著増および電気機械(標準変圧器等)の増加が響いて、全体では+8.7%と相当の増加を示した。建設資材も、亜鉛鉄板のほか窯業製品(セメント、ガラス等)、石綿高圧管等の増加から、全体では+0.5%の増加となった。また耐久消費財では、出荷の好調から家庭電気製品は減少したが、精密機械(カメラ、時計)およびオルガン等の増加から+0.1%の微増となり、非耐久消費財も洗剤、医薬品等の増加から+0.6%とやや増加した。生産財は鉄鋼および機械(汎用内燃機関、蓄電池等)の増加を中心に+3.9%の増加となった。反面、資本財輸送機械は、乗用車、小型トラック等の減少から-7.3%とかなり減少した。

10月の製品在庫率は、前記のような出荷の減少が響いて、+3.6%(同指数109.5)と前月に続いて上昇したが、その水準は依然として前年同月(同指数114.3)をかなり下回っている。特殊分類別にみると、建設資材、耐久消費財が低下したほかは各財とも上昇しており、なかでも一般資本財の上昇(+6.0%)が目だった。

メーカー原材料在庫(季節変動調整済み)は、7月-0.5%、8月-0.1%とわずかながら減少を続けたあと、9月(速報)は+0.5%の微増を示した。これは、主として国産原材料が、原料油脂等を中心に素原材料(+1.5%)、製品原材料(+0.8%)とも増加を示したことによるもので、反面、輸入原材料は、鉄鉱石、生ゴム等を中心に素原材料(-0.2%)、製品原材料(-6.2%)とも減少した。一方、9月の原材料消費(季節変動調整済み)は、+0.6%と8月の伸び(+1.1%)をやや下回った。業種別にみると、石油が工場定期修理などの影響から減少したほか、非鉄金属も輸入鉄石を中心に減少を示したが、鉄鋼業、機械工業などは引き続き根強い増勢を示している。以上の結果、9月の原材料在庫率指数は68.2と前月比-0.1%の低下を示した。

#### 製造工業原材料在庫および在庫率の推移

(季節変動調整済み、前期(月)末比増減率・%)

	42年			42年		
	3月	6月	9月	7月	8月	9月
在庫指数	141.8	155.0	154.8	154.2	154.0	154.8
前期(月)末比	4.9	9.3	-0.1	-0.5	-0.1	0.5
素原材料	7.5	11.1	-2.2	-3.0	0.5	0.4
うち輸入分	7.7	8.9	-4.7	-3.7	-0.9	-0.2
製品原材料	2.3	8.7	1.3	1.1	-0.5	0.7
うち国産分	2.3	8.7	1.4	1.0	-0.4	0.8
在庫率指数	67.0	70.6	68.2	69.5	68.3	68.2
素原材料	67.9	72.0	68.7	69.4	68.2	68.7
うち輸入分	68.0	71.2	65.1	67.3	64.6	65.1
製品原材料	69.9	73.2	71.3	73.3	71.9	71.3
うち国産分	69.7	73.1	71.3	73.1	71.9	71.3

(注) 通産省調べ、42年9月は暫定。

#### 販売業者在庫の推移

(季節変動調整済み、前期(月)末比増減率・%)

	41年	42年			42年		
	12月	3月	6月	6月	7月	8月	
総合指数	196.7	213.5	238.7	238.7	247.6	260.4	
前期(月)末比	-1.8	8.5	11.8	3.8	3.7	5.2	
素原材料	33.1	-7.4	15.0	6.7	0.9	-3.4	
製品	-5.5	10.5	11.2	3.7	4.6	6.3	

(注) 通産省調べ、42年8月は暫定。

次に、8月の販売業者在庫(季節変動調整済み、速報)は、鋼材、織物(主として合織)の引き続き増加に加え、自動車の著増もあって、全体で+6.3%とかなりの増加を示した。しかし、これにはモデル・チェンジなどに伴う自動車の一時的な在庫増も少なからず影響しているとみられる。

#### (設備投資——依然高水準)

設備投資の先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節変動調整済み)は、10月は前月比+44.5%と大幅な増加を示した。もっとも、これには企業の期末操作(上・下期別の受注高をならすため、前期末受注分の一部を10月に繰下げ)による面が大きいことはいなめない。業種別には、4か月連続して減少した鉄鋼が大幅に増加したほか、石油、窯業、造船等も著増を示したため、製造業は+60.3%と大幅に増加(9月は-28.2%の急減)、一方、非製造業(海運を除く)は、前月急増した電力は減少したものの、建設の増加を中心に+22.2%の増加を示した(前月は-10.9%)。

また、同じく先行指標である建設工事受注(民間産業、季節変動調整済み)は、9月に+10.5%と大幅な増加を示したあと、10月(速報)も+13.6%の著増となった。なお、官公需(季節変動調整済み)はこのところ月により大きなフレを示しており、9月急増(+37.1%)のあと10月は-15.1%の減少となった。

#### 需要別機械受注の推移

(季節変動調整済み、月平均、単位・億円)

	42年			42年		
	1~3月	4~6月	7~9月	8月	9月	10月
民需	1,179	1,340	1,353	1,447	1,199	1,613
	( 19.1)	( 13.6)	( 1.0)	( 2.3)	(-17.2)	( 34.6)
同(除海運)	1,060	1,300	1,212	1,341	1,023	1,478
	( 19.1)	( 22.6)	(- 6.7)	( 5.4)	(-23.7)	( 44.5)
製造業	631	787	756	843	605	971
	( 19.7)	( 24.8)	(- 3.9)	( 2.7)	(-28.2)	( 60.3)
非製造業	536	566	600	597	603	657
	( 16.7)	( 5.7)	( 5.8)	( 0 )	( 1.1)	( 9.0)
同(除海運)	421	520	452	485	432	528
	( 16.4)	( 23.5)	(-13.0)	( 10.3)	(-10.9)	( 22.2)

(注) 経済企画庁調べ、カッコ内は前期(月)比増減率(%)。

#### ◇商品市況は一部商品に軟化の動きみられるも、大勢は依然底堅い動き

最近の商品市況をみると、これまでの堅調な地合いが続いている中であって、10月後半から11月初にかけて一部の商品で多少とも軟化の動きがみられた。すなわち、鉄鋼が鋼板類、棒鋼を中心にジリ安ぎみとなって地合いの弱さを示したほか、繊維は高値警戒気運の台頭などから、綿糸、スフ糸、人絹糸等がそろって軟化し、また、鉛、木材、石油化学製品等も大勢弱含みぎみに推移した。こうした動きは、各商品によってそれぞれ固有の事情はあるにしても、一般に先行きの需要動向や金融情勢などに対する漠たる不安感が出はじめ、実需筋や流通段階の手当て態度がいくぶん慎重味を帯びてきたことが一因となっているように思われる。

もっとも、11月にはいつてからは、鋼板類が生産調整の具体化を背景に強含みとなり、また、綿糸も下げ過ぎの反動から小反発するなど主力商品がそろって上向く傾向を示したほか、銅も海外相場高から急伸するなど、ここへきて前月中の地合いの弱さを多少ともアヤもどす動きがみられ、また石油(灯油、軽油)、セメント、基礎薬品類、砂糖等は相変わらず堅調な地合いを続けた。このように、ここ一両月の商品市況は主力商品を中心に振幅がやや目立ち、また一部に先行きの情勢とからんで人气的な弱さもみられはじめているものの、総じてみると商品市況はこれまでの強含み基調を変えるまでには至っていない。

なお、中旬末における英ポンド切下げ、英米の公定歩合引上げなど、国際環境の急変によって、その商品市況面への影響が注目されたが、目下のところ、繊維が定期市場における売物の集中から一時全面安商状を呈したほかは、鉄鋼、非鉄等で模様ながめ気運が多少強まった程度と比較的軽微にとどまっている。

次に、商品別の動きをやや詳しくみると、まず鉄鋼では、鋼板類は10月中は大勢弱含みに推移したが、11月にはいつてからは、粗鋼減産やホット・

ストリップ・ミルの操業休止の具体化を背景に、高炉メーカーならびに商社筋が市中店売り価格の引上げなどの市況テコ入れ策を実施したため、特約店段階の手当て買いが集中し小反発場面を再現した。ただ、市中の在庫圧力がなお少ないだけに、実需筋では総じて慎重な手当て態度で臨んでおり、このため、メーカーが意図したほどの大幅値上げは浸透するに至っていない。一方、条鋼類では棒鋼が一貫してジリ安歩調をたどったほか、10月中強含んだ形鋼も頭打ちとなったのち再び弱含みぎみとなった。これは、先行きの需要動向に対する警戒感もあって、土建業界などでは当用買いの態度を続けているうえ、平電炉メーカーが原料安や厚中板の市況低迷から、小形棒鋼や形鋼生産をいくぶん増加していることによるものとみられる。繊維では、主力の綿糸が10月央以降11月初にかけ久方ぶりでかなり軟化したほか、スフ糸、人絹糸、そ毛糸等もそろって弱含み、生糸も反落するなど大勢軟化傾向を示したが、これは、

①綿糸やそ毛糸ではこのところ多少とも増産ぎみとなっていること、②こうした需給緩和のきざしをながめて、需要家の糸手当て態度がいくぶん落着きを取りもどしてきたこと、③中小問屋の行きづまりがやや目だちはじめていることから、問屋筋の仕ぶりもいくぶん慎重化してきたこと、などによるものとみられる。もっとも、綿糸は11月にはいって安値訂正から反発し、また、生糸も現物需給の引き締まりを映じた定期市場の急騰から再び最高値をつけた。なお、先行きについては、大勢としては軟化の方向をたどるとみる向きが多いが、綿糸、生糸等については、需給はなお引き締まりぎみに推移する公算もあり、多少の波乱はまず避けられないとみられている。また、非鉄についてみると、銅は米国の産銅スト長期化予想に伴う海外相場の急騰や、これをながめた大手電線メーカーの手当て活発化などから大幅に上昇したが、鉛は鉛管板、無機薬品関係の中小需要家が慎重な手当て態度を続けているうえ、輸入玉の来回

## 卸売物価指数の推移

(単位・%)

	ウエイト	下降期 (ピーク 38/11) →40/7	上昇期 (ボトム 40/7) →42/10	最近の推移							
				42年			42年10月			42年11月	
				8月	9月	10月	上旬	中旬	下旬	上旬	
総平均	100.0	- 0.7	+ 8.5	+ 0.4	+ 0.5	+ 0.8	+ 0.7	- 0.1	+ 0.1	+ 0.2	
食料品	16.4	- 0.4	+ 10.8	+ 0.5	+ 0.9	+ 3.6	+ 3.6	- 0.2	- 0.1	+ 0.2	
繊維品	12.9	- 8.0	+ 17.4	+ 0.5	+ 1.3	+ 1.0	+ 0.3	+ 0.3	- 0.2	- 0.3	
鉄鋼	10.2	- 3.4	+ 2.8	- 1.4	- 1.2	- 0.5	- 0.1	- 0.2	- 0.2	- 0.1	
非鉄金属	4.5	+ 18.4	+ 12.2	+ 1.3	+ 0.3	+ 1.4	- 0.3	- 0.2	+ 1.9	+ 2.6	
金属製品	3.5	+ 4.1	+ 6.5	- 0.1	- 0.1	+ 0.1	保合	保合	+ 0.3	+ 0.1	
機械器具	20.2	- 0.6	+ 1.3	保合	+ 0.1	保合	保合	保合	保合	+ 0.1	
石油・石炭	5.2	+ 1.0	- 1.2	+ 0.8	+ 0.7	+ 0.4	+ 0.1	- 0.1	+ 0.8	+ 0.2	
木材・同製品	6.1	- 2.7	+ 33.1	+ 2.4	+ 2.3	- 0.6	+ 0.1	- 0.4	- 0.5	+ 1.2	
窯業製品	3.0	- 0.8	+ 7.1	+ 0.4	+ 0.3	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.1	- 0.2	+ 0.1	
化学品	7.4	+ 1.9	- 3.1	+ 0.2	- 0.1	- 0.1	保合	- 0.2	+ 0.2	+ 0.1	
紙・パルプ	3.3	- 0.3	+ 4.3	- 2.2	+ 0.1	- 0.1	- 0.1	保合	保合	- 0.1	
雑品目	7.5	+ 1.1	+ 6.0	- 0.4	保合	+ 0.1	保合	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.1	
工業製品	79.5	- 1.4	+ 6.0	+ 0.2	+ 0.4	+ 0.2	+ 0.1	保合	+ 0.1	+ 0.1	
非工業製品	20.5	+ 1.5	+ 16.9	+ 0.6	+ 1.0	+ 2.5	+ 2.6	- 0.3	+ 0.1	+ 0.8	
非鉄・食料を除く 総平均	79.1	- 1.8	+ 7.8	+ 0.2	+ 0.5	+ 0.1	保合	保合	- 0.1	+ 0.2	

(注) 本行調べ、35年基準指数による。

りから需給が引きゆるみぎみとなっているため、引き続き弱含みに推移した。また、亜鉛はメッキ業界など需要業界の一部で仕ぶり慎重化の動きもみられるものの、海外相場が強含んだこともあって、大勢保合いとなった。

次に、石油では、冬場の需要期を迎えて灯油が堅調に推移したほか、揮発油もメーカー筋の値上げ方針が徐々に浸透して強含みとなったが、軽油やC重油は、メーカーの値上げ意向にもかかわらず需給が引きゆるみぎみとなっているため、ほぼ保合いで推移した。セメントは、民需が土建業界からの手当活発化を中心に総じて堅調に推移しているうえ、官公需も工事の進捗などからまず順調な伸びを続けているため、大勢強保合いに推移した。また木材については、製材は秋需一巡から荷動きが鈍ったこともあって、引き続き弱含みに推移し、国内原木も上げ過ぎの反動などから弱保合いとなった。化学のうち基礎薬品類については、カセイソーダ、カーバイドが需要の活発化に伴う市中の品薄から引き続き堅調に推移したのをはじめ、硫酸、塩酸等も需要期入りから引合いが活発化するなど、強含みとなったものが多いが、石油化学製品は、メーカーの増産体制の進展や、それに伴う販売競争の激化が響いて大勢軟化傾向を続けた。また紙のうち洋紙についてみると、出版業界向け需要の堅調から中質紙は強含みとなったが、上質紙やコート紙の一部は、歳暮関係需要の一巡などから頭打ち商状を呈した。一方、板紙では、外装用ライナー等一部の品目を除いては、荷余り感がやや強まっており、市況は弱保合い程度で推移した。この間砂糖は、歳暮用需要が好伸しているため、業界の生産調整に関する公取委の事情聴取にもかかわらず強含みとなった。

(卸売物価——根強い騰勢続く)

10月の本行卸売物価は、9月に前月比+0.5%と続騰したあと、10月は+0.8%と一段と騰勢を強めた。これは、消費者米価の引上げを映じて食料品が大幅に上昇した(前月比+3.6%)ほか、非鉄(銅地金、銅鉱石)、繊維(繭、綿花、羊毛)、石

油・石炭等も続騰したことによるもので、鉄鋼(くず鉄、鋼板、条鋼)、木材・同製品、紙パルプ等は小幅ながら軟化した。ちなみに、非鉄、食料を除く総平均では、前月比+0.1%の微騰にとどまった。11月にはいってからの動きをみると、上旬中は、海外相場高を映じた非鉄(銅)の上伸や、国内原木の反騰などが響いて前旬比+0.2%と続騰し、中旬も、非鉄、木材の続騰、繊維の反発などから同+0.4%とかなりの騰勢を示した。なお、工業製品価格も10月+0.2%の上昇のあと、11月上旬+0.1%、中旬+0.2%と根強い動きを続けている。

(消費者物価——大幅上伸)

消費者物価(東京)は9月に急騰した(前月比+2.4%)あと、10月も同+1.5%と引き続き大幅な上昇を示し、前年同月に比べてもこの2ヵ月は5%高前後と水準をさらに高めている。10月の上昇は主として消費者米価の引上げ(+14.4%)や、野菜、肉類の続騰から食料品が引き続き大幅に値上がりした(+3.5%)ことによるものであるが、光熱費(灯油、木炭)、被服費(秋冬物衣料)等もかなり上昇した。なお、季節商品を除いても、10月は前月比+1.2%と9月(+1.3%)に引き続き根強い騰勢を示した。この間、10月の本行小売物価も、消費者米価の引上げ、肉類の値上がりなど食料品の上昇を主因に、前月比+1.1%と上昇した。

(輸出入物価——輸出物価は続騰、輸入物価は久方ぶりに反騰)

10月の本行輸出物価は、前月比+0.2%と6ヵ月にわたる続騰となった。これは、国内市況の堅調を映じて繊維品(綿糸、スフ糸、綿織物)が上昇したほか、食料品(まぐろ・かつおかん詰)、機械、木材等が強含んだことによるもので、化学(鯨油、ポリエチレン樹脂)、金属(鉄鋼)は軟化した。一方輸入物価は、前月比+0.7%と久方ぶりにかなりの反騰を示した。これには、原綿、原毛の値上がりに伴う繊維品の大幅上昇(+2.2%)のほか、銅相場の急騰による鉱物、金属の上昇、プレート

消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位・%)

	ウエイト	前年度比 上昇率		最近の推移			最近の 前年 同月 比	
		40年度 平均	41年度 平均	42年				
				8月	9月	10月		
消費者物価 (東京)	総合 (季節商品 を除く)	100.0	+6.8	+4.7	+0.7	+2.4	+1.5	+5.4
	食料	91.4	+6.2	+4.9	+0.3	+1.3	+1.2	+4.3
	住居	40.9	+8.1	+3.0	+1.7	+4.2	+3.5	+8.9
	光熱	10.7	+4.4	+5.7	保合	+0.2	+0.3	+3.4
	被服	4.5	+0.4	0	保合	+0.1	+0.9	-0.2
	雑費	13.0	+3.8	+3.6	-0.2	+4.3	+0.5	+3.0
	雑費	31.0	+7.5	+7.9	保合	+0.4	+0.1	+3.5
物価 (全国)	総合 (季節商品 を除く)	100.0	+6.4	+4.7	+0.8	+1.6		+4.1
	総合 (季節商品 を除く)	91.4	+6.1	+4.7	+0.1	+0.9		+3.1
小売物価 (東京都)	総合 (生鮮食品 を除く)	100.0	+7.4	+4.6	+0.8	+1.6		+4.1
	総合 (生鮮食品 を除く)	91.3	+7.0	+4.6	+0.2	+0.9		+3.1
輸出入物価 (契約ベース)	輸出		-0.7	+1.4	+0.2	+0.2	+0.2	+1.2
	輸入		-1.0	+0.7	-0.7	-0.1	+0.7	-0.4
	交易条件		+0.3	+0.6	+0.9	+0.3	-0.5	+1.6

(注) 消費者物価(40年基準)は総理府調べ、小売物価(40年基準)、輸出入物価(35~37年基準)は本行調べ。

高による石油の値上がりなどが響いている。この結果、交易条件指数は前月比 -0.5%と7ヵ月ぶりで低下した。

◇国際収支は再び大幅の逆調

10月の国際収支は、総合で78百万ドルの赤字と3ヵ月ぶりに再び大幅な逆調となった。これは、貿易収支の黒字幅が、主として季節的事情により比較的小幅にとどまった(136百万ドルの黒字、前月は161百万ドル)うえ、長期資本収支の赤字が著しく増加した(前月の67百万ドルから118百万ドルへ)ためである。貿易収支(季節調整後)の動きをみると、輸入がやや減少したものの、輸出の伸びも一服状態となったため、黒字幅は99百万ドルとほぼ前月並みとなり、7月以降みられた黒字幅の拡大傾向は当月はやや一服模様となった。もっとも夏ごろ以降の動きをならしてみると、輸出が漸増基調をたどり、輸入の増勢が多少鈍りつつある点に変わりはなく、貿易収支は徐々に改善の

国際収支

(単位・百万ドル)

	42年			42年			前年 同月
	1~3月	4~6月	7~9月	8月	9月	10月	
經常収支	△58	△58	46	23	50	24	132
貿易収支	51	57	149	116	161	136	217
輸出	742	832	891	887	905	933	872
輸入	691	775	742	771	744	797	655
貿易外収支	△88	△98	△92	△83	△105	△103	△75
移転収支	△21	△17	△10	△10	△6	△9	△10
長期資本収支	△61	△61	△74	△77	△67	△118	△95
基礎的収支	△119	△118	△27	△43	△17	△94	37
短期資本収支(注1)	44	62	28	62	31	7	△56
誤差脱漏	△20	△12	5	30	28	9	20
総合収支	△95	△69	5	38	42	78	1
金融勘定(注2)	△95	△69	5	38	42	78	1
外貨準備増減	1	1	17	△54	40	28	△25
その他	△96	△68	22	92	2	50	26

(注1) 金融勘定に属するものを除く。  
(注2) 金融勘定の△印は純資産の減少。  
各期月平均。

輸出入指標の推移

(季節調整済み、単位・百万ドル)

	国際収支			通関		信用状		輸出 認証	輸入 承認
	輸出	輸入	貿易 じり	輸出	輸入	輸出	輸入		
41年									
10~12月	851	673	178	868	864	679	381	885	817
42年									
1~3月	829	685	144	848	908	675	394	905	866
4~6月	839	742	97	856	944	675	377	874	952
7~9月	865	779	86	887	984	689	379	902	973
42年									
6月	843	779	64	861	969	703	373	877	1,130
7月	822	746	76	840	940	672	368	870	948
8月	867	787	80	895	995	697	396	890	1,000
9月	905	805	100	926	1,018	698	375	947	971
10月	891	792	99	903	1,028	724	370	867	903

(注) 季節調整はセンサス局法による。各期月平均。

方向に向かっていくものとみられる。次に、貿易外収支は、海上運賃の上昇による海運収支の悪化を主因に引き続き大幅な逆調(103百万ドルの赤字)となった。また、資本収支では、長期資本は輸出延払信用や円借款の供与増大から、前月までに比べ赤字幅を一段と拡大し(118百万ドルの赤字、4~9月平均は67百万ドル)、短期資本はB Cユーザンス利用増加の一服から小幅の黒字にと

どまった(黒字額7百万ドル、前月は31百万ドル)。

一方、金融勘定では、為替銀行の対外ポジションが目だって悪化したうえ、外貨準備もかなり減少した(28百万ドル減)。為替銀行のポジション悪化は、主として、前月期末月の関係で増加した買持輸出手形の資金化が進んだため、同じく期末関係から前月著増をみた借入金若干の減少を示した。

輸出は、8、9両月かなりの伸びを示したあと、10月には前年同月比で+7%(前2ヵ月はそ

### 輸出信用状の内訳

(単位・百万ドル)

	42年			42年		
	1~3月	4~6月	7~9月	8月	9月	10月
合計	664 (+5)	689 (+3)	700 (+3)	725 (+2)	682 (+3)	708 (+9)
食料品	26 (-10)	25 (-1)	31 (+7)	32 (+15)	33 (+3)	30 (+2)
水産品	18 (-12)	16 (-1)	23 (+9)	23 (+14)	22 (-11)	20 (-5)
繊維製品	117 (+4)	112 (-4)	111 (-15)	111 (-25)	106 (-10)	135 (+12)
綿製品	21 (-20)	19 (-24)	18 (-38)	19 (-44)	17 (-31)	22 (-9)
化学製品	50 (+1)	58 (+14)	45 (-6)	50 (+8)	39 (-21)	40 (-10)
肥料	12 (-26)	17 (+5)	10 (-22)	15 (+38)	6 (-57)	6 (-38)
金属製品	141 (-2)	143 (-1)	150 (+5)	160 (+14)	142 (+1)	141 (+7)
鉄鋼	129 (-2)	132 (-1)	140 (+7)	151 (+17)	132 (+2)	131 (+8)
機械	195 (+15)	203 (+9)	218 (+13)	223 (+8)	219 (+13)	225 (+17)
船舶	9 (-6)	6 (-31)	13 (-10)	13 (+66)	7 (-53)	4 (-24)
自動車	51 (+17)	51 (+12)	43 (+19)	43 (+12)	45 (+26)	57 (+61)
その他	135 (+3)	148 (+2)	145 (+4)	149 (+4)	143 (+8)	138 (+3)
米国	263 (+1)	282 (+2)	293 (+9)	291 (+6)	290 (+11)	302 (+18)
アジア	196 (+15)	196 (+8)	198 (-5)	211 (-6)	191 (-4)	194 (+3)
欧州	75 (-8)	72 (-2)	66 (-4)	69 (+1)	63 (-11)	70 (+13)
その他	130 (+6)	139 (+2)	143 (+4)	153 (+6)	138 (+2)	141 (-2)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。

れぞれ+10%、+8%)、季節調整後の前月比で-2%と増勢一服状態となった。もっとも、最近の輸出の動きを季節調整後3ヵ月移動平均によりならしてみると、7月+1.8%、8月+2.5%、9月+2.7%と漸増していることからみて、そのテンポは緩慢ながら、引き続き回復傾向をたどっているものと思われる。10月の輸出を商品別(通関ベース)にみると、船舶が著増し、自動車も好調を持続したが、魚介類、綿・人絹織物、化学肥料等が引き続き低迷しているうえ、これまで好調であったラジオ、光学機器等も当月は増勢が鈍りきみとなり、また、前2ヵ月前年同月水準を上回った鉄鋼も再び前年比減少となるなど、概して低調であった。仕向先別には、東南アジア向けが香

### 輸入承認品目別内訳

(単位・百万ドル)

	42年			42年		
	1~3月	4~6月	7~9月	8月	9月	10月
食料品	148 (+15)	154 (+7)	145 (+7)	168 (+22)	137 (-14)	132 (-9)
原燃料	473 (+18)	481 (+20)	503 (+18)	527 (+28)	494 (+10)	482 (+14)
羊毛	32 (-7)	30 (-15)	28 (-15)	32 (+2)	25 (-26)	22 (-27)
綿花	44 (+14)	31 (+18)	32 (+1)	40 (+46)	30 (-19)	32 (+8)
鉄鉱石	45 (+25)	47 (+29)	49 (+15)	49 (+10)	50 (+7)	49 (+26)
鉄鋼 くず	26 (+236)	33 (+220)	27 (+91)	23 (+56)	28 (+75)	22 (-10)
非鉄 金属鉱	22 (+38)	21 (+13)	27 (+24)	27 (+10)	29 (+49)	24 (+7)
木材	58 (+31)	72 (+38)	80 (+46)	91 (+73)	76 (+29)	59 (+17)
石炭	26 (+35)	27 (+50)	26 (+25)	26 (+71)	25 (+11)	29 (+53)
石油	109 (+10)	102 (+23)	109 (+19)	108 (+22)	113 (+16)	134 (+39)
化学製品	50 (+25)	53 (+27)	56 (+30)	58 (+36)	54 (+26)	57 (+20)
機械	68 (+49)	155 (+171)	89 (+50)	96 (+67)	90 (+49)	76 (+33)
鉄鋼	31 (+265)	32 (+222)	38 (+145)	39 (+194)	34 (+74)	26 (+42)
その他	81 (+62)	94 (+45)	102 (+68)	105 (+77)	95 (+58)	112 (+55)
合計	851 (+26)	969 (+35)	933 (+26)	994 (+37)	904 (+14)	884 (+16)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。

港、南ベトナム、タイ向けの不振から前年水準を下回り、米国向けも前年比微増にとどまった。

輸出信用状は、前年同月比で+9%、季節調整後でも前月比+4%とかなりの増勢を示した。品目別には合織製品が米国向けを中心に増加したのがやや目だった。

一方、10月の輸入は、季節調整後では前月比-2%といくぶん減少したが、前年同月に比べるとその水準は高く、+22%と7~9月平均に近い伸びを示した。商品別の動き(通関ベース)をみると、食料、繊維原料等はかなり落ち着いている。反面、石炭、石油、木材、銑鉄、非鉄地金等は相

変わらず高い伸びを続けており、くず鉄等も増勢は鈍化しているものの、根強い増加の傾向を改めていない。

先行指標の輸入承認は、10月も前年同月に比し+16%と前月(同+14%)に引き続きやや低めの伸びにとどまった。このように、9、10両月の輸入承認の増勢がそれ以前(大口機械分等を除いた実勢で前年同期比+25~30%)に比べて鈍化したのは、主としてくず鉄、銑鉄の輸入が多少落ち着いてきたことによるほか、8月末の輸入承認取り急ぎの反動による面もあったものと思われる。